

あ と が き

○前号につづいて本号もまた特集号。マンネリズムをさげたい気持もあって、今度は「あとかき」に編集部外のかたを迎えようというところから引っぱり出したのが、「中東印刷」を経営活躍されている高林藤樹氏。氏こそ本会の生みの親であるかも知れない……。本会の胎動期から揺籃期までの状況を書いていただいたのが次の一文である。田村実造先生の「序」と併せてお読み願えれば、この特集号が宮崎先生の学恩にお応えしようとして企画されたわけも、おのずと御諒察いただけると思う。本会の誕生や、京大西アジア史学コースのそれに印された先生の御足跡は誠に大きなものがあった。しかも本会が一度発足すると先生はその成長をそれらの人びとにまかせ、みずからは退いて静かに見守ってくださった。編集子はそれを先生のお言葉や、その他の方々から、じかに感じとって来たが、この特集号の企画が期せずして打ち出されたのも思いは同じことであろう。

* * * * *

研究会誕生の頃のこと

高 林 藤 樹

昭和29年5月頃、草むす宇治分校々庭の一隅に、4～5人の青二才共が座をなしてグループを作ろうと話し合っていた。入学したばかりで文字通り西も東も知らぬ連中であつたが、会名を「東洋史研究会」と名づけ、持って生れた厚顔を發揮して羽田先生を顧問に頂き、勝手なことをしていた。これが今日の「西南アジア研究会」の濫觴となろうとは露知らず……。そしてその頃、いささか顔を利かしていたのが私であつたのだから、今思い出してもまことに恥しい限りで恐縮するばかりである。それでも毎週研究発表会を開き、時々コンパ等して羽田先生には大層御迷惑をおかけした。

当時のメンバーのうち東洋史専攻に進んだのは小野田実君と私の二人のみで、他は法学部や国史の方に進んでしまった。一人梵文学に進んだ小林信彦君は創設当初のメンバーの中での出世頭であり、今日尚研究の第一線にあって華々しい活躍をしている。

そのうち研究会も時々流会するようになり、また、会の主流が西アジア色を帯びていたので言葉の意味も知らず「塞外史研究会」と改称した。たまたま田村先生から御注意を頂戴し「塞外」を名乗ることの不似合さを知って「西アジア研究会」と更に名を改めた。この時、前記小林君の尽力で足利先生を会長に戴くこととし、同時に副会長に宮崎先生をお願いした。また、組織づくりも盛に進められた。当時はカラコラム探検隊に刺戟を受けた海外遠征熱が学生の間に高まり、特に探検部の第1次パキスタン遠征成功以来、色々なサークルが学内に誕生しつつあつた。

昭和31年には人文科学研究所の藪内先生を部長に戴く「中近東調査研究部」が、吉田光邦隊長及び3名の学生隊員をイランに派遣した。ここで岡崎敬氏の名を特筆しなければならない。岡崎氏は自らは勿論彼の地へ行かれたが、また一方、学生に向つては海外熱を吹き込み、大いに啓

あ と が き

蒙された。たまたま「中近東調査研究部」から、イラン出張中の留守役について協力要請があり、「西アジア研究会」もここで組織を拡充し、目標をはっきり打ち出そうということになった。足利・宮崎両先生の御指導、及び岡崎氏の御協力と相俟って、且つは組織拡大のため（財源確保のため）に会員獲得に乗り出し、凡そ西アジア・南アジアに関係の深い諸先生を綺羅星の如く集めた。そして昭和31年6月、ビヤホール「ニュートーキョー」に於いて「西南アジア研究会」発会式を盛大に挙行した。西南アジアと名称を決めた所以は、インドの存在は切り離し得ないという見地から「西アジア及び南アジアの研究会」という意味で、それは英語名を見ても明らかな通りである。尚、この英語名は岩村先生にお願いしてつけて頂いたものである。

発足当時は学生の任意団体として、会員は京都大学々生を主体とし、助手以上の教官は全部顧問とした。正会員僅々20名程に対して顧問は30名以上も居り、会費も顧問は教官だからと言う理由で会員よりも遙かに高額とし毎月厳重に徴収した。顧問から会費を徴収すること自体変則であるが、そんなことが、強引に行なわれた。会員は大半が東洋史研究室の学生で、会員獲得運動が無理に進められた様子がうかがわれる。

発会式の席上、いろいろ今昔談が出た中で足利・宮崎両先生の30年来の夢である「西南アジア史講座」設立がいよいよ実現しそうなところまで来たことが強調された。席上、宮崎先生がカイロで購められたアラビア語のレコードを店内に流して他客を驚かせたり、レバノンからの留学生の入会申し込みがあったりして賑やかな発会式であった。

それから研究会の活動は学生を海外見学旅行に派遣するという点にしばって行なわれた。イランがその対象に選ばれ、第1回のメンバーとして隊長に加藤一朗氏、隊員に考古学の田中琢君と私が決定した。旅行は昭和32年の夏に実行され、報道機関にもてはやされたりして研究会も華やかな存在となって来た。

一方、会誌も同年創刊され、会は内容に於いても一段と充実したものになった。当初はタイプ印刷のお粗末なものであったが、内容も勝れ意気まことに盛なものがあった。この会誌創刊には、清水誠・岡崎正孝両兄に負うところ極めて大であった。只一つ創刊号で MIDDLE EASTERN STUDIES と名乗っているのは大きな間違いである。

さて、この頃になると学外からも入会希望者や投稿希望者が現れ、研究会としては創設期の第1段階はもはや充分に固められたところまで来た。会誌も4号まで続刊されたが、いよいよ本格的な研究団体として斯界に君臨すべく、組織を改革して一人前の学会に生れ変ることになった。すなわち今までの学生会員とそれを上廻る多人数の教官顧問という制度をやめ、全部会員とし、目標を会誌発行を中心とする研究活動に置くことになった。そしてタイプ印刷だった会誌はつなぎのものとしてもう一号（5号）上梓し、以後は活版印刷に継承発展するということで一大飛躍を遂げた。

爾来研究会は益々堅実順調な発展を見せ、今日の隆盛を迎えたのであるが、組織の上でも、研究の上でも、最も大きな御恩顧を蒙った足利・宮崎・中原三先生がこの程相次いで退官された。

また、発足十周年を目の前にして、今や研究会は更に次の段階に進むべき時期に来ていると思われる。人工衛星で言えばロケットを脱して星になる時である。会の発展を祈りながら拙文をお詫びして筆を擱く。

* * * * *

○高林氏のあとをひきついで、もうすこし書いてみると、本誌もタイプ印刷で No. 4 を出したのち、約一年半の空白があってこれを埋めるために昭和 35 年秋総会を招集し、急いで No. 5 を出すことになり、また No. 6 からは活版印刷という含みで進んでみようということになった。この総会の席で今の編集陣とほぼ同じものが出来て事にあたることとなったが、No. 5 の編集後記は従来の慣例で高林氏（当時庶務係）に一任した。突貫工事といっても 35 年 11 月 25 日に原稿を渡してから、仕上がったのが 36 年 3 月 1 日だった。それはそれとして、No. 5 の編集後記に次号からの活版印刷が打ち出されたので、いよいよ来るものが来たわけ。少なくとも、これによって活版印刷へのふみきりがはやめられた。高林氏はそうした意味で、活版印刷の方でも「生みの親」みたいなことになられたし、今の「あぼろん社」社主伊藤武夫氏を紹介されたのも同氏であった。足利会長からは誌名を書いてもらい、さらにクレセントとサザン・クロスを配した会章を考えてみるようにとのこと。結局は吉田光邦氏の手になったが、下図を二つほど引かれたうちの一つである。会長も何か描かれたようだったが、吉田氏のものを見られたら、とうとう披露されずじまいになった。会章の下に入れるラテン銘については、凝り症(?)の吉田氏はその字体をマルコ・ポーロの「東方間見録」の某版からとってはどうかとずいぶん苦心されたが、なにしろ微視的小活となるので却て読みにくいだろうというので取りやめになった。出来上がった No. 6 のこのマークをみて、案の掟長尾雅人教授から、図案はクラシックだが文字はモダンだと御批評をいただいたし、上野照夫教授からも同じような御高評があったように記憶している。ということは、やはり読み易いということではあったろう。お膳立てが一切出来たのが 36 年 7 月 11 日、どうやら格好がついて雑誌らしい No. 6 が出来上がったのが同月 29 日。8 月早々所用で陳列館にいった研究室に引きかえす途中副会長の中原先生と出会った。「いま君の研究室にいったところですよ。立派なものが出来たとホホホにいったところで……」とおっしゃった。タイプ印刷では校正が思うようにやれず、実際この編集子も No. 2 にゴチャゴチャしたものを共筆したがタイプの打ちもろしが多いなどのために校正も限度があって思うようにいかなかった。それにタイプ印刷ではどうも同人雑誌か回覧雑誌みたいで、大道をあるくにはいささか気がひける。

○さて本号であるが、本号は特に多くの方がたの御援助を仰いだ。宮崎先生の著作目録は京大文学部東洋史研究室の寺田隆信、砺波護両氏と恵谷俊之講師のご協力に成り、同じく間野英二氏には宮崎先生の最終講義をレビューしていただくなど、感謝にたえない次第。先生は目録をうんと削って一、二ページにしばってほしいと申されたが、どれにも先生の深い御学殖が光っていて割愛するには惜しいものばかり。とうとう全部お載せすることにした、お叱りはこの編集子が一身に負うことにして。しかし会員諸氏にはこのほうが有意義なのではないかと、ひそかに慰めている。ところが

あ と が き

どうしても出来なかったのは、先生の近影をお載せすることであった。再三のお願いにもとうとうお許しかなかった。せめて台紙でもつけて会員諸氏に思い思いの近影をお貼り願おうかとも考えたが、これも先生にことわられてしまった。先生の御寄稿を頂戴できなかったことと共に、やはり残念だが致しかたのないことでもある。そうした点を十分にカバーするに足るものは、本号の内容である。東都学界からは三上次男先生の御寄稿をいただいた。規模雄大、細部にも精切卓抜な御論敵として巻頭——しかも「東西交渉史の研究」と銘打った本号の——を飾らせていただいたのは光栄の至り——最初に宮崎博士にお目にかかったのが昭和8年ごろと申しますので学縁も長く、何か一文贈呈させていただきます(39年12月19日付)とてお寄せいただいたもの。またそのほかの諸先生がほとんど京大史学・考古学畑の専攻であられるのも本号の特色として大書したい。京畿の学匠をはじめ、つくしのきわみ、陸のおくのみか、パリからもはるばる御参加いただいた豪華な筆陣は、ただ善をつくし美をさわむとでも申すべきか——かかる學術誌を手がけた編集部は編集冥加に尽きるというもの。一言を加えなばまさに蛇足の感あらむ。よってここには編集過程の一コマなりと御披露して三十六計をきめこむしかない。それは中原先生から編集子に寄せられたおハガキ(本年2月5日付)で、次のような御文面である：

拝啓立春とはいえ却って積雪を見るなどお寒いことですがお元気ですか……去る三十日(1月)宮崎君の文字通りの最終講義をきき、同夜の晩餐会に出席しました……扱宮崎君の記念号の原稿先月末に一応書き下し、……やっと原稿の原稿が出来ました……この度こそは誕生以来始めて期限内に(締切は2月末)執筆が出来そうです 僕にとってはエポック・メイキングの出来事です ウル古拙文書の解説とその意義とについて管見をのべました 先人未発の説となりそうです……この特集号への寄稿にいかにも熱意をもやされていたかがうかがわれる。表現こそ異なるが、他の方がたからも、いずれ劣らぬ熱意が披瀝され編集部はその都度愈々をむちうたれる思いであった。○本誌の反響を一つ二つ——中原先生のもとにローマ法王庁の Pontificio Istituto Biblico から『Orientalia』VOL. 34-FASC. 1-1965 がとどけられた。本誌が BSWSAS (Kyoto 1957-)として略記され、所収の古代学関係の諸論文がこれから続々と紹介されることになった。またチェコスロバキア学士院会員 Jan Rypka 博士からは、ぜひ欧文レジュメをつけよ、自他双方に益するところ絶大ならん、とのお誘いがあった。宮崎先生のお骨折で出来たともいえる 京大西アジア史学コースあたりから、そうした仕事を担当するかたの出られることを編集部は希望して筆をおきたい。